

入江 英弥 提出 学位申請論文（論文博士）

『オトタチバナヒメ伝承』審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、『古事記』『日本書紀』の景行天皇条所載のヤマトタケル東征譚に含まれるオトタチバナヒメの入水譚、その後の文献に見られる同入水譚と口頭で伝承されている入水伝説など、オトタチバナヒメを巡る伝承を対象とする。伝説等によるこの伝承は、上代の記紀から現代まで通時的に認められるのであり、その全容を文学研究と民俗学の両面から明らかにすることを目的とする。

文学研究と民俗学の両面からというのは、オトタチバナヒメに関する伝承である走水渡海中の入水などが、現在も伝説として東京湾沿岸部地域を中心に一定の範囲に数多く伝えられ、この伝説は『古事記』所載の弟橘比売命入水譚と密接な関係をもつことによる。具体的には、論文の序章で本論文の目的を示し、

その上で「第一部 伝説をいかに捉えるか」では民俗学における伝説研究を検討し、「第二部 弟橘媛入水譚を考える」では『古事記』の弟橘比売命入水譚などを、「第三部 オトタチバナヒメ伝説を考える」では在地に伝承されるオトタチバナヒメ伝説などを取り上げる。

オトタチバナヒメ伝承の全容を明らかにすることを目的とする本論文では、こうした構成のなかで一つには記紀のオトタチバナヒメ譚がいかに後代に受け入れられたかといった「話の受容」を課題とする。記紀のオトタチバナヒメ譚がそのまま後代に受け入れられているのか、それとも受容にあたっては時代に対応した内容に変容しているのかという問題である。もう一つは、伝承としてのオトタチバナヒメ伝説は東京湾岸地域など沿海部に顕著であるが、どのような地域にこの伝説が形成、定着したのかといった「話の生成」を課題にする。海浜への流着物を、走水の海に入水したオトタチバナヒメ譚への共感によって、これをヒメの遺骸や櫛などとする伝説が形成されたのか、あるいは日本の沿海地域にみられる漂着物や漂着神の祭祀習俗を基盤に、ヒメの入水譚

と結びつけた漂着物が神社祭祀として形成され、こうした中でオトタチバナヒメ伝説が生じたのかという問題に取り組んでいる。

以下では三部、合計十五章からなる本論文の要旨を第一部から章の順を追って記す。

「第一部 伝説をいかに捉えるか」は、民俗学における従来の伝説研究を振り返ることで、伝説研究の視座と論点を検討する。具体的には柳田國男と折口信夫による伝説研究を取り上げ、「第一章 柳田國男の伝説研究」では、従来の柳田の伝説研究は、その変化・変容といった歴史的展開に主眼があるとされてきたが、著述を改めて検証すると「村落の神話」を明らかにすることに目的があり、この目的に迫るために歴史過程における伝説の変化に着目し、その要因を主として時代ごとの社会事情に求めたこと、さらに柳田は伝説の特徴の第一に「人がこれを信じることをあげ、それが意味するところを論じるとともに、歴史学や歴史教育の進展のなかで伝説と史実の差異が明らかになるなかで、その伝承は伝説内容の合理化が行われて変化し、伝説内容が信じられるように

更新されていくという見解を明確にする。「第二章 折口信夫の伝説研究」では、折口の「愛護若」や「信太妻」研究を取り上げ、折口は伝説の流動性を重視し、これは在地伝説が戯曲や小説といった文芸に取り込まれ、その流行によって伝説が再構成されて再び在地化していく過程を明らかにしたことを示す。

「第二部 弟橘媛入水譚を考える」は、今日のオトタチバナヒメ伝説のもとになったといえる『古事記』の弟橘比売命入水譚など、上代、さらに中世のオトタチバナヒメ伝承の考察を課題とする。

「第一章 『古事記』 弟橘比売命入水譚研究史」では、『古事記』の弟橘比売命入水譚に関する先行研究を検討する。おもにこれを対象としてきた上代文学研究においては、その研究史は整理されていないことからの検討で、従来の研究は、ヒメ入水譚の背景に関する研究、入水譚内容に関する研究、入水譚形成に関する研究の三点に集約できるとする。こうしたヒメ入水譚の研究史を踏まえて、「第二章 『古事記』 弟橘比売命入水譚1」では、『古事記』の記載からは倭建命東征譚は「道中の重要な場面ごとに障害が待ち受けていて、ここに「道行き」の典型

を見出すことができる」とし、これは「(a) 主人公が道中で危難に遭遇する。(b) 同行者が助言する。(c) 同行者の援助により、主人公が危難を克服する」というプロットをもつことを指摘する。さらに、ヒメ入水譚の形式を「走水の海」という場所を指標にすると、これは異なる世界に由来する女性が巡行する男性を守護し、役割を終えるともとの世界に戻るといふ形式をもつと論述する。

これに続く「第三章 『古事記』 弟橘比売命入水譚²」では、『古事記』のヒメ入水譚について、十二世紀前半の歌学書『和歌童蒙抄』所載の「海難説話」との対比などを行う。記紀のオトタチバナヒメ入水譚は、「海難説話」の一つであることを示しての論述で、「海難説話」は、「主人公が道中で海難に遭遇する」、「同行者が助言する」、「その通りにすると危難を克服することができる」というプロット形式をもつことを提示した上で、『和歌童蒙抄』所載の「海難説話」はこの形式をもつ典型であり、『古事記』のヒメ入水譚も典型とはいえないが、この型であるとする。『古事記』の当該の内容は、編者によって前段の野火の難の場面と一組のものとして企図されており、前段では、倭建命が叔母の援助と

自らの知恵によって野火の難を克服し、当段では、妻の知恵と献身によって海難を克服する。こうした構成からは、倭建命とその援助者の力によって東国の野と海とが秩序だてられ、これにより皇化が東国全体に及び、領有確定を示さうとしたという見解を示す。

第四章「『常陸国風土記』の倭武天皇と大橋比売命伝承」では、『常陸国風土記』行方郡相鹿・大生里条の「倭武天皇」と「大橋比売命」が「安布賀の邑」で出会う話を取り上げる。これを本論文で扱うのは、「倭武天皇」「大橋比売命」という名が倭建命、弟橋比売命と類似することによるが、結論としては、これは記紀の倭建命東征譚とは別個に展開した伝承とみられるとする。それは、これは既知の者同士が再会を求めることで、この地で再会が叶ったと読み取れ、それを記念してこのような邂逅譚が伝えられたのであり、これはこの地が皇化を受け入れ、大和と直接結びついた地であることを示すことに目的があると結論づける。

第五章「中世における日本武尊水難の話」では、室町時代初めの史書『神明鏡』

にみえる日本武尊水難譚を取り上げる。本論文にこの稿を加えるのは、「日本武尊」の表記からはここに記される水難譚は『日本書紀』をもとに再構成されたと考えられるが、内容としては水難譚の前段に位置する火難譚は記紀の内容に沿う一方、水難譚は記紀とは異なり、龍神が船中の美女である「橘姫ト申夫人」を求め、日本武尊が姫を海に流すという内容となっている。しかし、主人公が道中で障害に遭遇し、同行者が助言し、その助言に従うことで障害を克服するという「道行き」の形式をもつことでは記紀と同型といえると指摘する。このことから記紀の入水譚は、後代においては内容をそのまま受容する場合と、「道行き」形式のような骨組みをもとに、その時代の思考や素材を取り込んだ内容にして再構築する場合とがあると説く。

第二部はこのように『古事記』を中心とする文献からのオトタチバナヒメ伝承の研究であるのに対し、「第三部 オトタチバナヒメ伝説を考える」は、地域に伝承される現代のオトタチバナヒメ伝説の研究である。ここではこの伝説について、内容と分布という実態を明らかにするとともに、個別地域における

オトタチバナヒメ伝説の伝承実相を明らかにする。

この部の第一章と第二章では、伝説を内容から分類し、伝承分布を明らかにすることでこの伝説の全体像を示す。第一章「オトタチバナヒメ伝説の分類」では、オトタチバナヒメ伝説を内容によって分類し、分析を加える。この伝説は、入水そのものではなく入水後の沿海地への漂着物が主題になっていて、このことから当伝説は「遺骸漂着伝承」、「遺物漂着伝承」、「その他」に分類できるとする。「遺骸漂着伝承」に関しては、水難者供養や海上安全祈願といった信仰を基に形成される場合と、うつほ舟といった漂着神伝承に基づいて形成される場合があること、「遺物漂着伝承」に関しては、女性を象徴する櫛や衣服、袖などの遺物が漂着し、これらが弟橘比売命入水譚と結びついてオトタチバナヒメの物だと認められて形成される場合と、漂着物が女神の依代として祀られ、後代、その女神がオトタチバナヒメだと説かれて形成される場合があることを明らかにする。

「第二章 オトタチバナヒメ伝説の分布」では、オトタチバナヒメ伝説の伝承

分布がいかに形成されたのかを課題とする。伝説の伝承地は東京湾岸地域を中心に、愛知県・静岡県東部から茨城県にかけて確認でき、地域を限定して分布する伝説であることを明らかにする。そして、こうした分布は、入水地を中心とした地域で漂着物を得て暮らす海辺の人びとの民俗を基盤にしながら、記紀のオトタチバナヒメ伝承の広まりを契機にして伝説が生じたとみられる場合や、漂着物や漂着神を祀る神社がオトタチバナヒメの入水譚の流行によってゆかりの神社となり、そうした中で伝説が生成したと考えられる場合が認められるとする。こうして各地に生成された伝説が人々の交流によって維持され、今日見るような分布域が形成されたと予測する。

「第三章 オトタチバナヒメ伝説と祭り」では、オトタチバナヒメを祀る千葉県富津市西大和田の吾妻神社の祭りを取り上げ、祭りとその起源伝説の関係について考察する。ヒメの櫛が流れ着いたので岩瀬地区の人たちが馬に乗せて吾妻山にもたらして祀ったことが当社の始まりであり、神馬神事の起源であると伝承される。しかし、この祭りはケガレの除去と海難者への供養が中心にある

と考えられ、伝説とは別個に形成されたと判断でき、オトタチバナヒメ伝説との結びつきは後代のものと推察する。

「第四章 船大工が伝えるオトタチバナヒメ」では、埼玉県寄居町末野の船大工が行った船下ろし儀礼を取り上げて、なぜ人形を流す儀礼が行われ、これがオトタチバナヒメであると伝えるようになったのかを課題とする。船大工によるオトタチバナヒメ伝承は、ここだけではなく宮城県七ヶ浜町、茨城県鹿嶋市、大分県姫島村にもあり、各地の船大工がこの伝承を持ち伝えたことも考えられること、また、これは入水によって船と乗客の命を救ったというオトタチバナヒメの行為が、船の安全を第一に求める船大工によって評価されたと考えられること、さらに、この背景には戦前の国定国語教科書にヒメの話が取り上げられ、その知識があったことが予測できるとする。

「第五章 神奈川県横須賀市走水のヤマトタケルとオトタチバナヒメ伝説」では、神奈川県横須賀市走水におけるヤマトタケルとオトタチバナヒメ伝説の伝承実態を明らかにする。走水のオトタチバナヒメの入水伝説には、中世の

『神明鏡』の入水譚とつながる内容があったり、ヒメの入水が女性の乗船を忌避する漁民の穢れ観と結びつけて合理解説されたりするとともに、地名由来も含め数多くのヤマトタケル伝説が伝承されていることを示す。

第三部最終章の第六章「オトタチバナヒメを祀る神社の伝承」では、東京都・千葉県・神奈川県に鎮座するオトタチバナヒメを祀る神社を取り上げ、東京都内の神社についてのヒメに関わる伝承を実地調査から提示する。オトタチバナヒメを祭神とすることが契機となって、入水譚を踏まえた「櫛塚」が設けられ、祭典まで行われるようになった目黒区下目黒の大鳥神社の例など、現代においてもオトタチバナヒメ伝承によって新たな民俗が生み出される場合があることを指摘する。

本論文最終の終章「本書のまとめ」は、標題の通り各章をまとめて結語としている。

論文審査の結果の要旨

現在、東京湾沿岸地域を中心に伝承されているオトタチバナヒメ伝説は、ヤマトケルが走水の海を渡る際に大波で船を進められなくなった時に、オトタチバナヒメが自ら入水することで波が鎮まって無事に渡海でき、このヒメの遺骸や遺品が沿岸に流れ着き、それを神社に祀るようになったなどの内容をもっている。

本論文では、こうしたオトタチバナヒメの伝説が愛知県・静岡県から茨城県にかけて四十五例ほどあることを確認し、その伝承実相と歴史的展開、さらにはその伝承の仕組みを明らかにすることを目的としている。論者はこの目的に迫るために、この伝説が『古事記』『日本書紀』の景行天皇条にあるヤマトケル東征譚に含まれるオトタチバナヒメの走水の海への入水譚に深く関係し、現在、伝承されている伝説はこれに淵源する可能性が高いことから、論述を『日本書紀』の記載も視野に入れながら『古事記』の弟橘比売命の走水の海への入水譚、後に記紀のヒメ入水譚を受容して再構築される室町時代初期の『神明鏡』

の記述と、在地に伝承されている現代の伝説からの双方から行っている。論文の「第二部 弟橘媛入水譚を考える」が前者の研究、「第三部 オトタチバナヒメ伝説を考える」が後者の研究で、これによって当該伝説の伝承実相と歴史的展開の検討、分析を進めている。

本論文が高く評価できる第一点目は、論文要旨に記したように、この研究は記紀のオトタチバナヒメ入水譚、関連の可能性がある『常陸国風土記』の倭武天皇と大橋比売命の伝承、『神明鏡』のヒメ入水譚、また在地に伝承されるヒメ入水伝説、オトタチバナヒメ伝承と結びついた祭礼、船大工によるオトタチバナヒメ伝承、入水譚の舞台となった神奈川県横須賀市走水におけるヤマトタケルとオトタチバナヒメの伝説、さらにはオトタチバナヒメを祭神とする神社と、いうように、オトタチバナヒメをめぐる伝説・伝承を幅広く視野に入れながら通時的な研究を進め、後述するような成果をあげていることである。

第二点目は、第二部では『古事記』所載の弟橘比売命入水譚についての研究史を、入水譚が所載される背景・時代状況、内容、形成経緯という三点から

整理した上で、入水する「走水の海」という現場からの視点、十二世紀前半の『和歌童蒙抄』などにある「海難説話」の構成からの視点を設定し、これらによって『古事記』のヒメ入水譚についての研究を進展させていることである。入水の舞台である「走水の海」という場からは、弟橘比売命の入水譚は「異なる世界に由来する女性が巡行する男性を守護し、役割を終えるともとの世界へ戻る」という形式が措定できると説く。

さらに、「海難説話」を含む説話での危機回避からは、「主人公が道中で危難（海難）に遭遇する」「同行者が助言する」「同行者の援助により、主人公が危難を克服する」という形式が措定できるとし、これを「道行き」と命名している。『古事記』倭建命東征譚の、走水渡海の難は妻である弟橘比売命の知恵と献身によって主人公が救われ、この前段の相武国の野火では姨である倭比売の援助があつて難を克服しており、両者ともこの形式をもつ。さらにこの形式は『和歌童蒙抄』のうちあげ浜譚、『神明鏡』のヒメ入水譚も同様であると指摘する。『神明鏡』の水難時のヒメ入水譚は、龍神が美女である「橘姫」を求め、日本武尊が

夫人の橘姫を流しており、『古事記』とは内容が異なるが、水難・入水譚の形式は同じで、「道行き」という形式を維持しながら、後代にはその時代の思考や素材を取り込んで再構成されるという、伝承の仕組みを発見している。

評価できる第三点目は、在地で伝承されるオトタチバナヒメ伝説は、ヒメ入水譚の舞台とその周辺の沿海地域において、広範に存在する水難者供養、海上安全祈願、「うつほ舟」などの漂着神祭祀、さらには漂着物の活用習俗を基盤にして、記紀のオトタチバナヒメ入水譚が受容され、漂着物をこの入水譚に結びつけることで伝説が生成されたと説くことである。このことは、千葉県富津市西大和田における吾妻神社の祭礼と当地でのオトタチバナヒメ伝説との関係を実地調査によって明らかにした事例研究、神奈川県横須賀市走水におけるヤマトケル、オトタチバナヒメ伝説の伝承実態研究によって補強されている。

入江英弥の学位請求論文の優れた点をあげると以上に集約できるが、一方では論証等が不十分といわざるを得ない点がある。その一つは、本論文の「第一部 伝説をいかに捉えるか」では、柳田國男と折口信夫の伝説研究を再検討し、

従来とは異なる見解を提示している。しかし、第二部以降のオトタチバナヒメの伝説研究では、柳田・折口の視点、方法の有効性や限界性については触れられておらず、伝説研究の方法論的検討が課題として残る。二つ目は『古事記』の弟橘比売命入水譚の研究史は、この「話」の背景、内容、形成で整理できるとしているが、「話」という表現は口承文芸研究においては「世間話」研究で議論されている用語で、伝説研究での使用が妥当か、また、重要な伝説形式として「道行き」という用語を使っているが、この用語が適切かという、論文中の術語使用で検討が必要なものがある。もう一点あげると、オトタチバナヒメにゆかりする物を祀る神社には「吾妻」名が多いが、その事由についての検討がまったく行われていないとともに、「吾妻」名とも関係すると考えられるヤマトケル伝説との関連についても今後の課題となる。

本論文には、こうした不十分な点や課題があるが、オトタチバナヒメ伝承の全体像を通時的に明らかにするとともに、伝説の伝承に関する仕組みを提示するなど、研究の独自性と伝説研究進展への寄与が認められる。よって本論文の

提出者入江英弥は、博士（民俗学）の学位を授与されると判断される。

令和三年十一月二十四日

主 査	國學院大學教授	小 川 直 之	印
副 査	國學院大學教授	大 石 泰 夫	印
副 査	國學院大學准教授	飯 倉 義 之	印

入江 英弥 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試問を行った結果、博士（民俗学）の学位を授与される学力があることを確認した。

令和三年十一月二十四日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	小川直之	印
副査	國學院大學教授	大石泰夫	印
副査	國學院大學准教授	飯倉義之	印